

令和五年（二〇二三）三月二十五日発行
『大倉山論集』第六十九輯抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

森村市左衛門と教育活動

— 森村学園の創立と私学への支援事業 —

松 本 茂

森村市左衛門と教育活動

— 森村学園の創立と私学への支援事業 —

松 本 茂

目次

はじめに

一 森村グループについて

二 大倉孫兵衛さんとのこと

三 森村市左衛門の生涯

(一) 市左衛門が貿易を志すまで

(二) 森村豊とアメリカ貿易

(三) イーストマン商業学校のこと

(四) 森村明六と豊の死

四 森村市左衛門が行った教育活動

(一) 教育活動への支援

(二) 森村学園（南高輪幼稚園）の創立

(三) 市左衛門没後の森村学園

五 森村市左衛門の教育活動に影響を与えた人たち

おわりに

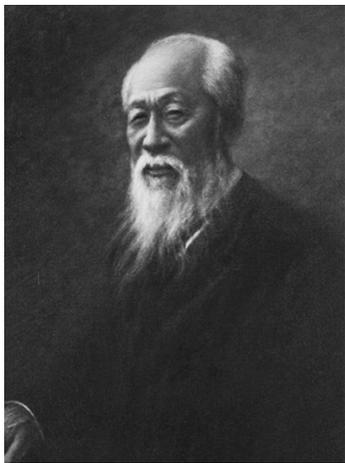
はじめに

このたびは、この歴史ある大倉山講演会にお招きいただきました。まことにありがとうございます。今回、「森村市左衛門と教育活動」というテーマでお話させていただきます。

森村市左衛門は、私の高祖父、つまり、祖父の祖父にあたります。

市左衛門は晩年、自宅の庭に小さな幼稚園と小学校を創立いたしました。学校はその後、横浜市緑区長津田町で幼稚園から中高等部までの「森村学園」として発展し、私は現在、その理事長を務めております。

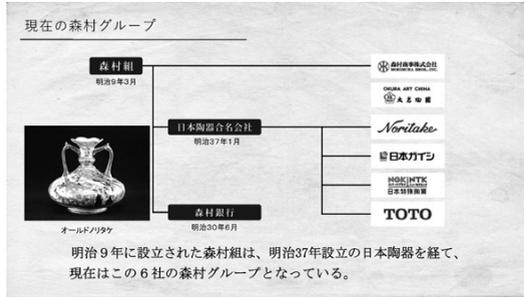
一 森村グループについて



【写真1】晩年の森村市左衛門の肖像

まずは簡単に森村市左衛門についてご紹介させていただきます。市左衛門（【写真1】）は、一八三九年、幕末の天保十年に生まれました。そして、明治時代に民間で初めての日米貿易事業を開始し、さらに欧米への輸出用に陶磁器の生産と卸を行ったことで事業を大きく発展させ、一代で森村財閥と呼ばれる企業群を築いた実業家です。

また、数々の教育機関に援助をし、自ら森村学園という私立学校を創立したことも知られています。



【写真2】現在の森村グループ

市左衛門は、激動の幕末から明治時代を生き抜き、一九一九年の大正八年に八十歳で亡くなりました。

市左衛門が亡くなった後、第二次世界大戦後の財閥解体等により、現在では森村財閥は森村商事、大倉陶園、ノリタケ、日本ガイシ、日本特殊陶業、TOTOの六社となり、森村グループと呼ばれています。一八九七年（明治三十年）には森村銀行も設立されていますが、後に三菱銀行と合併しています。

ちなみに、【写真2】にあるような、いわゆるオールドノリタケと呼ばれる陶器は、ノリタケの前身である日本陶器合名会社が、明治期から戦前までに欧米に輸出した陶磁器のことです。主に花瓶や洋食器などですが、絵付けや細工が芸術的だということで愛好家も多く、現在も収集家のコレクションの対象になっています。

二 大倉孫兵衛さんとのこと

市左衛門には、商売を始めた若いころに知り合い、それから公私ともに深い付き合いとなった一生の相棒とも呼べる存在がいました。その方が、この大倉精神文化研究所を創立された大倉邦彦先生の義理の祖父、大倉孫兵衛さんです。

今回は、大倉山論集ということで、孫兵衛さんと市左衛門のお話もさせていただきます。

孫兵衛さんは森村の初期から市左衛門を助けて、共に森村の基盤を作り、一九〇四年（明治三十七年）に市左衛門らと共に日本陶器合名会社を設立しました。それが現在のノリタケです。さらに孫兵衛さんは、現在、皇室御用達窯として知られる大倉陶園を設立、日本の陶磁器産業に多大なる貢献をされました。

森村だけでなく、邦彦先生が継承された大倉洋紙店や大倉書店も、孫兵衛さんが創業されたと聞いています。孫兵衛さんはこのような大実業家であるだけでなく、日本女子大学等への教育支援も市左衛門と共にしています。

孫兵衛さんと市左衛門の出会い、開港間もない横浜港でした。ペリーが来航し、日米修好通商条約が結ばれて、横浜港が海外に向けて開かれたところです。横浜開港が一八五九年、安政六年ですから、今から百六十年以上前ということになりました。

市左衛門は、横浜港で海外から来た舶来品を仕入れて、日本の武家に売り歩く商売をしていました。同じころ、絵草子屋の次男坊だった孫兵衛さんは、横浜港で外国人に錦絵を売っていたそうです。出会った年ははっきりとはしていませんが、おそらく市左衛門は十九歳くらい、孫兵衛さんは四歳年下ですから十五、六歳くらいだったでしょう。そのころの、こんなエピソードが残っています。

横浜港で孫兵衛さんの持っていた錦絵がすぐに売り切れてしまい、買い損ねた外国人が「トマロウ、トマロウ」と孫兵衛さんに話しかけてきました。「トマロウ」ですから、孫兵衛さんはこの辺に泊まるのかと聞かれたかと思ひ、「泊まらないで江戸に帰る」などと答えましたが、もちろん通じない。

そこにたまたまやってきた市左衛門が、「トマロウというのは明日のこと、明日も来るかと聞いているんだ」と教えてあげた。二人はそんなことで知り合い、意気投合したとのこと。

孫兵衛さんは市左衛門の妹と結婚しましたが、残念ながら三年で死別してしまいました。その後、孫兵衛さんは再婚して森村家とは縁が切れたはずだったのですが、実際には本業の錦絵販売のほうは番頭さんにまかせて、市左衛門の貿易の仕事を無償で手伝い、仕入れ旅行などにも同行したとの話が残っています。

決して資金は潤沢ではなかったので、仕入れ旅行は交通機関を使わずに歩くなどして、さぞかしたいへんだったろうと思うのですが、若かった二人は、いろんなことを計画したり実行したりして、とても楽しかったのだと思います。二人はたいへん気の合った仲間であり、商売においても同志だったのでしょう。

孫兵衛さんの長男の和親さんも、森村の日本陶器、日本碍子（現…日本ガイシ）、東洋陶器（現…TOTO）の初代社長を歴任された人で、大倉陶園の設立者でもあります。

その孫兵衛さんのお孫さんと結婚されたのが邦彦先生で、邦彦先生と市左衛門に感じる共通点は、企業経営で得た利益や時間を「世のため人のため」、教育事業等の社会貢献活動に費やした点にあります。

生前、大倉先生と市左衛門が会う機会があったかどうかはわかりませんが、もしそんな機会があったのだとしたら、二人はかなり意気投合したのではないかと想像できます。

三 森村市左衛門の生涯

(一) 市左衛門が貿易を志すまで

さて、ここからは市左衛門についてお話いたします。

教育というテーマですが、市左衛門本人は特にこれといった教育を受けないまま、若くして商売の道に進みました。



【写真3】15歳の頃の市左衛門

それは、経済的に余裕がなく、父親と共に家族六人を養っていたためです。市左衛門は、一八三九年（天保十年）に、京橋で生まれました。時代は江戸末期、幕府が倒れ、時代はすぐに明治となり、鎖国も解かれて、海外から物だけでなく思想も流入してくるなど、日本人の価値観が大きく揺れる時期でした。

森村の家は、六代続いた商人でしたが、森村家はたびたび災害や家事に見舞われており、特に一八五五年（安政二年）の江戸の大震災では、火災で家屋や家財といった全財産を失い、家族で住むところもなく焼け出されました。これにより若くして一家を背負うこととなった市左衛門は、昼は日雇い労働者、夜は露天商をして働いたのです。そして、ようやく少しばかりのたくわえを作って、家業を再開させました。

そんな十代を過ごした市左衛門ですが、知的好奇心は旺盛で、字引を頼りに頼山陽（たのやまのうら）の『日本外史』を一生懸命読んでいたとの記録があります。この『日本外史』は、漢文体で書かれた全部で二十二巻もある歴史書で、源氏平家の時代から徳川時代までの武家の盛衰の歴史が書かれた、読みこなすのもたいへんな本です。この本に書かれた北条早雲の生き方、例えば戦場で手柄があつたときにはひとり占めせず、財宝でも領地でも惜しげなく部下に分けてやるといった考え方を、市左衛門は後の事業に活かしていたとの話もあります。

森村の事業の成功は、先にお話した大倉孫兵衛さんをはじめとした優秀な仲間がたくさんいたのも大きいと思いますが、そんなところにこの北条方式が見て取れたりします。

そして、市左衛門の目が海外に開ききつかけとなったのが、一八五九年（安政六年）の横浜開港でした。市左衛門は、その後の人生に大きな影響を与える二人の人物と出会いました。一人は、先に申し上げた大倉孫兵衛さん、そしてもう一人は、福沢諭吉先生です。

開港を契機に、当時十九歳だった市左衛門は、横浜港で舶来品の洋服や雑貨などを仕入れる商売である唐物屋とうぶちやを始めました。仕入れた舶来品は、武具商時代の伝手を使って武家屋敷等に持ち込みましたが、その販売先のひとつに、中津藩の藩主である奥平家がありました。中津藩の桑名登という家老が市左衛門の店に出入りするようになり、やがて殿様の御用も担当するようになったのです。その中津藩で、足軽という身分でありながら先生と呼ばれ、神様のよううに思われていたのが、福沢諭吉先生です。

福沢先生は市左衛門の五歳年上で、当時は中津藩江戸屋敷に蘭学塾を開いて藩の子弟に教えており、下級武士の出身でありながら士族から尊敬される存在でした。

市左衛門は、海外を知る広い視点から日本を見る福沢先生に大きな影響を受けました。

「近いうちに世の中が変わり、町人の地位が上がり、武士の方から町人と交際を求める時代になる」。

福沢先生のそんな話を最初はあっけに取られて聞いていた市左衛門でしたが、自身も横浜港での仕入れの体験から世の中が変わりつつあることを肌身で感じていたので、福沢先生の話は次第に腑に落ちていったものと思われれます。それまでこれといった教育を受けてこなかった市左衛門も、「福沢先生の話を聞くうちに、世間のこと、人間のこと、また世界の大勢のことがだんだんわかってきた」と後に語っています。市左衛門にとって福沢先生はまさに師であり、後年にはお互いに助け合う生涯の友ともなりました。

この頃、日米修好通商条約の批准書交換のために、アメリカへ幕府の使節団が遣わされることになりました。

その幕府側の使者の代表に任命された新見正興しんみ まさむねと森村家が懇意だったことから、市左衛門と父親は使節団の土産物と一行の着用する衣服の調達を依頼されました。この土産物はアメリカ大統領と役人三十人に手渡すもので、市左衛門は先方が喜びそうな日本のものを選び、かんざし、櫛、錦絵などを入れた蒔絵の箱を用意しました。ちなみにこれは一箱二十五両かかったそうです。衣服は、袴というわけにもいかないので陣羽織を用意しました。

旅行中に使うお金も、市左衛門が両替をしました。日本の小判はもちろんアメリカでは使えませんので、メキシコ銀という外貨が必要でした。そこで市左衛門は、徳川家から三十個の千両箱を出してもらい、警護付きで横浜まで行き、その合計三万両を外国人商会でメキシコ銀と交換しました。このとき、市左衛門は相場を知らず、向こうから渡されただけのメキシコ銀をそのまま持ち帰ったにすぎませんでした。

当時の両替相場は、貨幣はすべて質も量も同じものを交換するという条約がありました。しかし、幕府ももちろん市左衛門も外国の貨幣と日本の小判の違いを知らず、交換レートは日本にとって非常に不利なものになっていました。要するに日本の金がとても安く買ったかかっているという事実を、市左衛門はこのとき目の当たりにしたのです。

市左衛門は「このままでは日本の金が海外に流出してしまう」と大きな危機感を覚え、それを福沢先生に伝えたところ、このように言われました。

「国の独立を保つ根本は、貿易を盛んにして国家を富ませることにある」

市左衛門も、「貿易は国家のために大切なものだ」と考えていました。市左衛門が、海外との直接の貿易で日本の金を取り戻そう、貿易の先行者になろうと決心したのはこのときです。つまり、自分が儲けるための貿易でなく、国のために貿易をやろうという考えからのスタートでした。もともと森村家には冒険を好む傾向がありましたので、国のためだけでなく、そうした森村家の血も多少なりと影響を与えていたかもしれません。

しかし、当時の日本からしたら、海外との貿易など夢のような話でした。市左衛門は決して初心を忘れることはありませんでしたが、人、資金、そしてタイミングなどの問題が山積で、実際に貿易を行うまでに、それからさらなる年月が必要でした。

そして、それから十六年後、市左衛門は十五歳年下の弟の豊とよの手を借りて、ついにアメリカとの貿易を始めたのです。

一八七八年（明治十一年）、豊がニューヨークに渡って店を開き、市左衛門が送った日本の雑貨を販売することで、民間初の貿易事業はスタートしました。さらに豊のアイデアにより、アメリカ人が好むような陶器を日本で作ってアメリカで販売することで事業は大きく拡大し、それがやがて森村財閥に発展し、現在のノリタケという会社につながっていきます。

これだけ申し上げると、市左衛門は素晴らしい商才の持ち主で、順風満帆で財閥を作り上げたように思われるかもしれませんが、実はそうでもなく、失敗も多かったのです。

市左衛門は、貿易事業を始めるまでのあいだ、様々な事業を行っています。例えば大政奉還の年である一八六七年（慶応三年）に、軽騎兵の馬具の製造を始めました。製造の指導をしたのは、徳川幕府に招かれたフランスの軍事顧問団の中の一人、デシャルム騎兵中尉でした。このデシャルム中尉に市左衛門はたいへんな影響を受けるのですが、それはまた後でお話したいと思います。

その事業はともうまくいき、その利益を元手に市左衛門は様々な事業に手を出しました。大阪城内での養蚕や、小樽での漁師への融資事業、四国での銅山経営などを次々と行ったものの、実はほとんどが失敗に終わり、負債を抱えて破産するという結果になりました。

弟の豊が慶應義塾に入學したのは、そんな資金難の頃でした。

その後、明治に世が変わり、市左衛門は明治政府から改めて帝國陸軍重騎兵用の馬具製造を依頼され、再び馬具工場の経営を始めます。そして工具が数百人を超えるまでに事業が成長して、借金の返済にも成功しました。ただこの事業も、担当役人に賄賂を要求されたことから、あっさりと工場をたたんだのです。

次に手掛けたのは、洋服裁縫店で、市左衛門は銀座に「モリムラテーラー」を開きました。明治時代は西洋文化の流入により、洋服の需要が伸びた時期でした。

(二) 森村豊とアメリカ貿易



【写真4】 弟の豊と森村市左衛門
森村商事(株)提供

さて、話は市左衛門の貿易を始めるための準備の時期に戻ります。

いざ海外貿易の仕事をするとなると、まずは英語の力がが必要です。しかし市左衛門は仕事が忙しく、英語を勉強する暇もない。そこで、弟の豊に「英語を勉強して、アメリカへ行って海外貿易の仕事をしてほしい」と頼みました。

当時豊は十四歳。尊敬する兄に頼まれて嬉しかったのだと思います。「やりましょう」と二つ返事で承知しました。二人はとても仲の良い兄弟だったそ



【写真5】 ニューヨークの森村ブラザーズ

森村商事提供

うで、ここから森村兄弟は、共に貿易という壮大な夢に向かって歩み始めたのです。

豊は一八七一年（明治四年）に福沢諭吉先生の慶應義塾に入り、英語を学びました。そして二十二歳の時、一八七六年（明治九年）に「米国商法実習生」の一人に選ばれ、ついにニューヨークに渡ることができました。

先に申し上げたように、市左衛門の事業は、うまくいったり失敗したりの繰り返しでした。せっかく豊がアメリカに渡るチャンスが来たというのに、市左衛門にその資金がなくて躊躇していたところ、福沢先生に何度もはっぱをかかけられ、ついに決心したというエピソードも残っています。

最終的に市左衛門は妻のかんざしまで売り払って渡航費用を作り、当時経営していた「モリムラテーラー」の二階に輸入商社「森村組」を設立しました。ちなみに現在、その場所は、銀座の教文館ビルになっています。

さて、ニューヨークに渡った豊は、商業学校で勉強した後、ブロードウェイ五四一番地に「森村ブラザーズ」という会社を作り、貿易の仕事を開始しました。日本から市左衛門がアメリカで売れそうな古美術品、陶器、ちようちん、人形などの雑貨を集めて送り、豊がニューヨークの店でそれを販売するところからのスタートです。ついに、民間初の貿易事業が始まったのです。

豊のアメリカでの商売はとても正直で親切だったため、信用がおける店として評判になったそうです。例えば、こんな話があります。アメリカ人の店員が商品を間違えて高く売ってしまった。「お客さんはその値

段に納得して買ったのだから、このままでよいのでは」という店員に対し、豊は「商人の利益には一定の基準があるから、無法なことはすべきではない」と言つて、差額を返金させました。商売において正直であれという豊のそうした一貫した姿勢は、アメリカという異文化の社会でも毅然とした印象を与え、その結果、日本人は信用できるとの印象を与えたのです。

アメリカの森村ブラザーズは、森村豊が渡米した一八七六年（明治九年）から一九四一年（昭和十六年）までの十六年間の間、営業を続けました。最後は日米開戦による、やむなくの閉鎖でした。森村ブラザーズは、商売の場というだけでなく、日本人社員とアメリカ人社員との交流の場でもあり、さらにオールドノリタケに象徴されるような、日本という国と文化をアメリカ人に紹介する役割も果たしたといえます。

さて、森村ブラザーズは順調に事業を続け、創業から四年後には一年間で十萬ドルを売り上げ、さらにその十三年後には売上四十五萬ドルにも達しました。規模は急激に拡大し、日本から社員も呼び寄せ、森村ブラザーズはアメリカにおける屈指の日本商社となります。一八七〇年頃から「ジャポニズム」という日本趣味のブームが起こったことも追い風になりました。

そこで、市左衛門は次の目標として、豊のアイデアもあり、アメリカ人好みの食器や花瓶を作って輸出しようと考え、一九〇四年（明治三十七年）に大倉孫兵衛さんと共に、日本陶器合名会社、後のノリタケを設立します。ノリタケの目指したものは、質の高いテーブルウェアでした。ノリタケは日本で初めてデイナーセットを作ったメーカーとなりましたが、実はこのセットを作るまでに十年かかっています。

日本の陶器は一つ一つが同じ形ということはありませんが、欧米で使われていた白磁の食器、例えばデイナー皿なら同じ形、同じ大きさが求められます。また、底の平らな大皿を作る技術が当時の日本にはなく、この課題の克服に

苦労したためです。

ようやく完成したダイナーセットは一九一四年（大正三年）に輸出が始まり、初年度は二十セットのみの出荷が、四年後には四万セットというヒットになりました。この成功が、森村ブラザーズを大きく成長させたのです。

ちなみに、この食器や花瓶のうち、初期に制作されたものが、最初にご紹介したオールドノリタケです。一つ一つが職人による絵付けで、骨董愛好家から美術品として現在も高い評価を受けています。

日本経済も成長を続け、一八八二年（明治十五年）には日本銀行が創立され、市左衛門は理事、監事に任命されています。市左衛門はそのほかにも多くの会社の設立に力を貸し、幅広い実業活動を行いました。

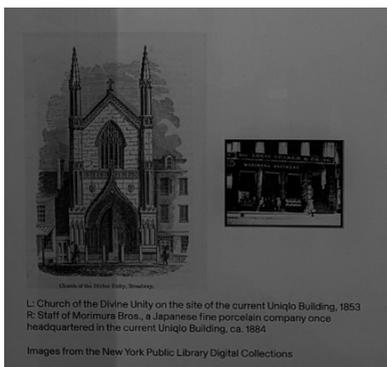
またその一方で、森村組ニューヨーク支店は、渡米する福沢諭吉門下生の拠点にもなり、また福沢先生の推薦で慶應義塾からは森村ブラザーズに何人も入社したとのことです。

ところで、私は最近、そのニューヨークの森村ブラザーズのあった場所【写真6】に行く機会がありました。中に入ってみると、Origin（起源）と書かれたプレートに、「日本の優れた磁器の会社」と紹介された当時の森村ブラザーズ本社と従業員一同の写真があり【写真7（参照）】、なんとも懐かしい気持ちになりました。もちろん私が生まれる前の時代のことですが、森村の原点である森村ブラザーズのごころから聞いていたためか、何とも感慨深い経験でした。

現在、そのビルには同じ日本企業であるユニクロが入居しており、同時に時代の変遷を感じた次第です。



【写真6】 ニューヨークの森村ブラザーズ跡地
松本茂 撮影



【写真7】(上) ビル内の Origin プレート
／ (下) 右が従業員集合写真
松本茂 撮影

(三) イーストマン商業学校のこと

話は少し戻ります。アメリカに渡った直後の豊は、商売を始める前に、まずは商業学校に入って三カ月間ビジネスを学びました。それはイーストマン商業学校という学校で、豊はここで最初の日本人学生となりました。

この学校を作ったハービー・イーストマンという人は、当時ニューヨーク郊外のポーキプシー市の市長でもあり、馬車の切符売りから立身出世をして富豪になった人物でした。自分の体験から教育の必要を感じ、私財を投じてこの学校を作ったのです。そしてイーストマン自ら教壇に立ち、生徒に商人としての心構えなどを教えていました。

豊が卒業した後も、森村組の社員はこの学校で学ぶことが慣例となり、森村組はこの学校のおかげで、日本のどんな会社よりもアメリカ市場をよく理解することができたのです。

「弟は福沢先生に仕込んでもらったうえに、イーストマンのような立派な教育家に教えられたのは、我が森村組の幸福であった」といったことを、後に市左衛門は語っています。このイーストマン商業学校の存在も、市左衛門が後に学校を作る決心をした大きな要因の一つだと、私は思っています。



【写真 8】 イーストマン商業学校

(四) 森村明六と豊の死



【写真9】ニューヨーク時代の3人
(後列：豊、前列左から開作、明六)

出典：『森村学園の100年』

市左衛門には長男の明六、次男の開作という二人の息子がいました。二人とも、豊と同じく慶應義塾を出てニューヨークに渡り、イーストマン商業学校を卒業して、豊のもとで商売の見習いを始めました。

当時は日本が日清戦争に勝利して世界での地位が向上した時期で、ニューヨークの森村ブラザーズには追い風が吹いていました。

しかし明六は、これから活躍しようというときに結核を患い、一八九九年（明治三十二年）八月に二十六歳の若さで亡くなりました。

その同じ年の七月、弟の豊も胃がんのため四十五歳という若さで亡くなりました。

この、長男と弟の相次ぐ突然の死が、市左衛門最大の悲劇でした。仲が良いだけでなく、本当に信頼し合っていた兄弟であり、また市左衛門の志を継ぐはずの長男でした。二人を失った市左衛門の嘆きはたいへんなもので、「左右の手を失ったような気がした」とまで言っていたそうです。

豊は、一八七六年に初めてアメリカに渡ってから一八九九年の死去までの二十三年間、太平洋を四十数回も横断し、兄を助けて森村組の発展に大きく寄与しました。当時は横浜からニューヨークまで船を使って一カ月くらいかかりましたから、往復で二カ月です。豊はその生涯のうち八十カ月以上、つまり六年と八カ月以上は海の上で移動していた

ことになります。体にそうとうな負担をかけて、大変な仕事をしていました。

市左衛門は、「年からみると私の弟ですが、人物と功績から言うと言つてもよいくらいで、私の杖とも柱とも頼っていたのです。ところがその弟が、またせがれと相前後して死んだのですから、私としては自分が死ぬよりつらい思いをしました」と後に語っています。

私は、貿易という仕事にまい進すべく、太平洋を渡り、それこそ寝食を犠牲にして仕事に打ち込んだ森村豊こそ、日米貿易のバイオニアとしてもっと世間に知られるべきだったと思つています。豊のニューヨーク生活は、店で毛布をかぶつて寝泊まりをし、商品の受け取りや荷ほどき、販売を自ら行い、食事をする暇もないくらい仕事に忙殺される生活からのスタートでした。豊の死は、日本よりもむしろアメリカで大々的に報道され、ニューヨークタイムスは豊の訃報をその生涯と共に記事掲載しています。

やがて悲しみから立ち直つた市左衛門は、「天が自分に向かつて若い者に代わつて最後まで働けということをお命じになったのだらう」と、両人の精神を受け継いで奮闘することを誓います。そして、豊が平素から「もしできる身分になったなら、国家のために金を投じたい」と言つていたことを思い出すのです。

アメリカ生活の長かつた豊は、おそらくは当時、アンドリュー・カーネギー、ジョン・ロックフェラーといった大富豪が企業利益を社会や教育に還元している様子を見聞きし、その影響も受けていたのでしょう。

そこから生まれたのが、森村豊明会という民間の助成財団です。この豊明会という名前は、亡くなった二人、弟の豊、長男の明六から一文字ずつを取つたものです。

市左衛門はこの森村豊明会から様々な教育や文化に対して支援を行いました。

市左衛門と豊の兄弟には、お金は「天から一時的に授かつたもの」という考えがありました。そのお金が役立つと

思われた時には、それを使わなくてはならない。森村豊明会の援助先は、そういう理由で特に人を育てること、人材教育に焦点を当てていました。

そして還暦を過ぎた市左衛門は、事業も後継者たちに任せ、事業の利益を教育や社会に還元する活動を始めました。さらに後の森村学園を作ったからは運営にも熱心に携わることとなり、これが最晩年の仕事となりました。

四 森村市左衛門が行った教育活動

さて、ここからは市左衛門が行った教育活動について、お話しします。

大きくは、先に申し上げた豊明会を通しての教育への支援活動、そして、森村学園の創立の二つです。

(一) 教育活動への支援

陶磁器の生産や輸出も好調で、事業も順調となった市左衛門ですが、もともと貿易業を志したのは、日本を豊かな国にしたい、欧米に並ぶ文化の進んだ先進国にしたいという大志からでした。自分の利益よりも、社会の利益をより重視するという考え方でした。ですので、事業が安定してきたとき、その利益を社会貢献に向けるのは、当然の流れだったと言えます。

あるとき、福沢諭吉先生から、北里柴三郎先生が困っているという話を聞きました。北里先生は、破傷風の血清療法を確立するなどして、留学先のドイツで医学研究者として素晴らしい業績を上げ、ケンブリッジの細菌学研究所長への招聘を断って日本に帰ってきたところでした。そこには日本の公衆衛生のために尽力したいという希望があっ



【写真10】 成瀬仁蔵（後列左端）、広岡浅子（後列左2番目）、森村市左衛門（前列左2番目）

（一社）日本女子大学教育文化振興桜楓会 提供

たのですが、当時の明治政府は伝染病研究所の設立に非協力的でした。そこで福沢先生が土地建物を提供し、市左衛門は研究機材用の費用を援助、その後も継続的に支援を続けていました。

そして長男の明六、弟の豊の死から二年後の一九〇一年（明治三十四年）、市左衛門は二人の追善供養のため、森村豊明会を設立しました。先に申し上げましたが、これは亡くなった二人の名前から命名されています。森村豊明会は、教育・福祉・文化事業の助成を目的とした慈善団体として、日本における民間助成団体の草分けとなりました。

市左衛門は、この森村豊明会を通じ、慶應義塾、高千穂商科大学といった教育機関に支援を行いました。なかでも有名なのが、日本で最初に創立された女子大である現在の日本女子大学に対する支援で、これが設立されて第一号の支援となりました。

この日本女子大学創立の話は、NHKの朝の連続ドラマ「あさが来た」というドラマでも知られているかと思います。主人公のモデルである広岡浅子さんは、晩年、成瀬仁蔵先生に協力して日本女子大学を創立されました。その際、市左衛門も、孫兵衛さん、渋沢栄一氏らと共に協力をさせていただいています。

日本女子大学の付属小学校と幼稚園である、日本女子大学附属豊明小学校、日本女子大学附属豊明幼稚園という名称は、森村豊明会が建築資金をご提供したということで付けていただいた名前です。

豊明小学校では、今でも授業で名前の由来や市左衛門についての授

業をしてくださっているようで、まことにありがたいことです。

余談ですが、市左衛門は成瀬仁蔵先生を紹介されたからと言って、すぐにお金を出すのではなく、しばらく成瀬先生の人となりを確認し、「よし！」となつてから初めて資金援助をしたとの話が残っています。人物を見極めてからようやく支援するあたり、商売の世界で生きてきた人だなという感じがします。ただ、一度援助するとなつたらとことん行うという点もまた、市左衛門らしいと感じるところです。

森村豊明会の活動は現在も続いており、二〇一一年（平成二十三年）四月に公益財団法人となつて、援助先も数百団体に上っています。私も評議員の末席として名を連ねております。

（二）森村学園（南高輪幼稚園）の創立

日本女子大学の創立にかかわつた市左衛門は、その後、今度は自分の理想の教育機関を作りたいと考えるようになりました。

これについてはちよつとしたエピソードがあります。日本女子大学の先生方と親交を深めるようになった市左衛門の邸宅に、あるとき、付属幼稚園の園長であつた甲賀ふじ先生が遊びに来られました。この甲賀先生という方は、明治時代にアメリカに渡つて、教育学で知られていたシカゴ大学で幼児教育を学んだという、当時の幼児教育における最先端の教育者でした。

その甲賀先生が森村の家を訪問されたとき、お庭の花を眺めながら、こうおっしゃつたのだそうです。



【写真11】 森村邸の庭にあつた頃の森村学園



【写真12】学園創立の頃の全校生徒

「花をつくるのもよいですが、人を作ることが大切ではないでしょうか」

この一言が市左衛門を動かしたのです。

そして一九一〇年（明治四十三年）に市左衛門の南高輪の自宅の庭にできたのが、森村学園の前身となる、「私立南高輪幼稚園」と「私立南高輪尋常小学校」でした。学園創立時には、この甲賀先生をはじめ、日本女子大から優秀な先生方に教師として来ていただいています。

最初の生徒は、市左衛門翁の孫と近所の子供たち数人で、一九一三年（大正二年）に行われた初めての卒業式は、

男子四人、女子四人の八人でした。

学園では、ロバや山羊、クジャクなどの動物が飼われており、四季折々の植物も豊富で、小さな池では冬になると児童が滑って遊んだそうです。高名な実業家が邸内の美しい庭園の中に学校を作ったと話題を呼んで、当時は大変な評判となり、新聞にも報じられました。

このとき市左衛門は七十一歳で、森村学園を作ってから没するまでの九年間を、教育と人材育成に捧げました。先生方には「いい人を作る学校にしてください」と言い、子どもたちには「正直、親切、勤勉の三つを守れば、世の中にできないものはありませんよ」「強くて良い人になってください」と、ことあるごとに伝えていたそうです。

ちなみに、この開校したばかりの学園には、二十世紀を代表する芸術家のイサム・ノグチさんも一年半ほど在校していました。イサム・ノグチさんの初め

ての作品は、この時に森村の幼稚園で作った青い焼き物だったとのこと。市左衛門が陶器で財を成して森村学園を創立したことを思うと、何かご縁を感じます。

当時、渋沢栄一氏と市左衛門は「明治大正期のメセナ（文化支援）の両雄」と言われており、渋沢氏は市左衛門の学校のことを「森村さんは小学校を設立され、世の官僚式な形式主義の注入教育ではなく、自然教育がよいという趣旨から、深くその点に力を注がれた」と評価してくださっていました。二人ともたくさんの事業を起こした実業家でありながら、仕事は共にすることなく、支援活動で協力し合っていたという関係だったのも面白いところです。同年代でしたが、亡くなったのは市左衛門の方が先で、そのとき渋沢氏は涙ながらに追悼の辞を述べたとの記録も残っています。

(三) 市左衛門没後の森村学園

私立南高輪尋常小学校から森村学園という名称になったのは、一九四一年（昭和十六年）からですが、便宜上ここからは森村学園とさせていただきます。

一九一九年（大正八年）に市左衛門が亡くなり、当時四十八歳だった次男の森村開作が二代目の校長となりました。開作は、豊と同じく慶應を出てからニューヨークの森村ブラザーズに入り、日本に帰ってからは森村財閥を引き継いでいました。

日本はその後、関東大震災、第二次世界大戦という大きな出来事がありました。そのなかで現在にも通じる学園の方向性を定めたのが、この開作でした。開作はあまり自分のことは語らない人でしたので、市左衛門に比べてあまり逸話的な話は残っていません。しかし、子どもたちに自宅の庭を開放したり、大震災の後は子どもたちの安全のた

めにいち早く鉄筋コンクリートの校舎を作るなど、おびただしい私財を学園に注ぎました。森村学園には優秀な教師が集まりましたが、これも開作の尽力によるものです。

余談ですが、開作はニューヨークからの帰国後に日本にゴルフを紹介し、日本ゴルフ協会の初代会長を務めました。また、ビジネス界の世界では、一九二五年（大正十四年）にアメリカで開発されたIBM計算機（コンピュータの原型）を日本で最初に輸入した人物でもあります。

ゴルフを楽しみ、近代科学や機械にも造詣が深い開作はスマートな紳士といった印象で、たたき上げの市左衛門とはイメージがずいぶん違いますが、私財を投じて教育に情熱をかたむけるといふ点は共通していました。

第二次世界大戦後に開作は公職追放となり、いったん実業界を離れざるを得なくなり、その後追放は解かれましたが、公職には戻らず、学校運営に専念しました。子どもたちに、「食べ物や食生活を良くかんで食べるのですよ」とよく言い聞かせていたところから、晩年の開作は、子どもたちからカムカムおじいさまというあだ名で呼ばれていたようです。

開作の時代にとりわけ有名となったのは、一九一六年（大正五年）に始まった「自然科」の授業でした。これは、子供に事物を示して子供の感覚を磨き、理解力を発達させる「直観」と言われる指導方法を発展させたもので、具体的には、まず実物を見せて体験してから、その仕組みを児童に推測させるといった教育法です。

例えば、先生が子どもたちに自動車のおもちゃを見せ、子どもたちがその仕組みをそれぞれが想像して、紙に書きます。その後先生がおもちゃを分解して、それぞれの想像図と比較します。またある日は、凧や竹トンボなどを子どもたちが作り、飛ばない場合はなぜだろうと考えて、改良していきます。つまり、子どもが仮説を立てて、実験で検証する学習法で、当時としては理科教育の先端をなすものでした。

また、学園の近くには農園もあり、そこで子どもたちは種をまき、肥料をやり、草をむしって収穫し、作物の成長を観察し、記録しました。

担当の箕島伊兵先生はこの教育実践をまとめた論文を発表し、全国的にたいへんな評判となりました。当時、森村の理科の授業を見学しようとする人が増え、授業に支障をきたしたので断るようになったという記録も残っています。残念ながら関東大震災の時に焼失してしまいましたが、この授業の教科書は箕島先生の手作りという貴重なものでした。

また、森村学園では当時の小学校ではめずらしいネイティブによる週一回の英語教育や、ピアノ科、割烹科などの教科もありました。英語は時代によっても違いますが、だいたい初等部二年から授業が始まっていたようです。市左衛門や開作には、貿易事業の先駆者として、日本の発展のためには早期の英語教育が必要だという認識があったのでしょうか。学芸会では英語劇も上演されたとの記録もあります。当時は英語教育を行っていた学校がほとんどありませんでしたので、時代の先端を行く教育をしていたのだと思います。

森村学園のユニークな教育は、優秀な先生方のおかげでもあり、開作がそうした先生方を招くことに力を注いだ成果でもありました。

また、文部省から補助金を受けない私立小学校という位置づけもあり、ある程度自由な教育が可能だった時代だったといえます。現在は学校という縛りもあり、受験もあり、なかなか思い切った個性的な授業をするのは難しい時代ではありますが、現在も森村学園には、広い敷地に豊かな自然があり、当時の授業の面影が残っています。

こうして、市左衛門とそれに続く開作の時代に、豊明会も森村学園も組織としてきちんとした土台が作られました。市左衛門にしても開作にしても、先生方に「いい人を育ててください」という要望だけを伝えていたそうです。ビ

現在の森村学園



【写真13】現在の森村学園

ビジネスを通して世界を見てきた二人が、子どもの教育に関わった時、最終的にそのようなシンプルなことを言っているのです。この「いい人」にどれだけ深い意味が込められているのかと思います。

森村学園が現在もきちんと存続しているのは、子どもたちにいい教育をしよう、そのために私財を投じて校舎などのハードを作り、優秀な先生方を迎え、教育の充実を目指してきた先達の作ってくれた土台のおかげだと思っています。

市左衛門の座右の銘は「独立自営」ですが、これは森村学園の建学の精神となりました。

校訓は「正直・親切・勤勉」です。この人格の土台となる三つを、子どものうちに心に植え付けて欲しいというのが、市左衛門の考えであり、願いでした。

市左衛門は貿易の仕事を始めたとき、あえて政府の援助を受けずに民間貿易を始めました。同じ頃、政府援助による貿易会社も多く設立されましたが、援助に頼った経営は長続きせず、バタバタと倒産していきました。こうした経験もあり、市左衛門は「独立自営」という言葉を、依頼心を持たずに何事も自分の判断と責任のもとに行う。人任せにしないという意味で使っていたかと思います。時代と共に解釈も変わり、現在の森村学園ではこの建学の精神を、「自分の力で営みができる、社会に貢献できる」といった意味で子どもたちに教えています。

森村学園は二千人を超える生徒を有する幼稚園から高等部までの学園となり、二〇二二年（令和四年）で創立百十二年目を迎えました。現在でも森村学園は、「独立自営」は、校訓である「正直・親切・勤勉」と共に、「人徳を備え、自らの力で

人生を切り拓き、世界の力、社会の力となる」人材の育成を行っています。

市左衛門の教育活動として、森村豊明会、森村学園の二つについてお話してきましたが、ここに至る前にも、市左衛門が教育ということについて考え続けた足跡をお話ししたいと思います。

五 森村市左衛門の教育活動に影響を与えた人たち

先ほど、貿易の仕事が始めるにあたって、福沢諭吉先生に多大な教えと影響を受けたお話をいたしました。市左衛門には他にも影響を受けた方々がいます。

その一人に、フランス人のデシャルム中尉がいます。

市左衛門がもともと武具商人だったことから、幕府の軍隊が洋式化されるのに伴い、西洋鞍の製造を依頼され、その製造法を教えてくれたのが、フランス人のデシャルム中尉でした。製造法を手取り足取り教えてくれたデシャルム中尉はとても親切な方で、市左衛門はその人柄にも感銘を受けました。友情は中尉がフランスに帰国してからも続き、市左衛門がパリ万国博覧会に行った際には、デシャルム中尉の住むサンティエヌヌまで会いに行き、歓待されたとの記録が残っています。

そのデシャルム中尉が市左衛門に熱心に語ったのが、女子教育の重要性でした。

「女性の教育をおろそかにする国は興隆しない。女性が教育されて知識が高くなった国は文明国になる。今日東洋の衰えているのは、女性を人間として扱わず、無教育のまま置くからだ」。

デシャルム中尉はこのように語り、それに感銘を受けた市左衛門は一八七五年（明治八年）、当時経営していた銀

座のモリムラテラーの中に「森村女紅場」を開設し、女子教育に乗り出しました。これは寺子屋形式の学校で、読み書きの他、裁縫や手芸を教えていたとのこと。市左衛門の女子教育への思いは、その後日本女子大学への援助に繋がっていきます。日本女子大学は、当時の女子教育のシンボルとなりました。

明治時代は、まだまだ女性に学問は不要と思われる時代です。しかし市左衛門は「一国の文明は、女子教育のレベルによってはかられる」との信念を持っていました。その信念のルーツに、デシャルム中尉の影響があったことは間違いないでしょう。

弟の豊を通して知ったイーストマン商業学校を作ったハービー・イーストマンという人物も、事業で蓄えた私財を投じて、商業学校を作った教育者です。学校を作って国家社会に役立つ人を育てるという発想は、ここからも影響を受けていると思われれます。

そして、市左衛門が最も影響を受けたのが、弟の森村豊でしょう。豊の「もしできる身分になったら、国家のために金を投じたい」との言葉が市左衛門を動かし、森村豊明会ができたのです。

また、森村学園ができたころ、名古屋の日本陶器（現ノリタケ）には普通教育を受けられなかった社員が中卒程度の教育を受けられる夜間学校もできていました。

晩年の市左衛門は実業家の視点からの教育論をいくつも書いていますが、理論だけではなくきちんと実践もしていたという点が市左衛門らしいなと思うところです。

おわりに

今回こうして講演のご依頼をいただき、自分なりに関係者から話を聞いたり、書籍を読んだりしながら、市左衛門の生き方をもう一回勉強させていただきました。

江戸から明治という大変な価値観の混乱と変化の時期に、福沢諭吉先生の話を「すごいすごい」と目を輝かせて聞き、受け取った話を自分の中で消化して行動を起こした市左衛門。そんな市左衛門に期待されたことを嬉しく思っただけでなく、がんばった弟の豊、そんな姿が生き生きと私の脳裏に浮かびました。

市左衛門は事業の成功者でありますが、決してとっぴなことをしたわけではなく、人の話を聞き、咀嚼して自分のものにし、アイデアを持ち、行動するという基本の行動を踏んで階段を上ってきた人です。

また、市左衛門にはたいへん優れたところがありました。それは、人の教えを吸収して自分のものにできたこと、考えたことを実行する力があつたこと、そして明治の時代に日本を良くするためにまず人を育てることと考えること、子どもたちの教育のために力を注いだこと、そしてきちんと組織を作り活動を後世に伝えたことであると、私は思っています。

森村市左衛門という人が残した精神は、森村学園における建学の精神や校訓として残ってはいますが、こうして今回、大倉山講演での機会をいただいて、市左衛門の生涯を改めて俯瞰することで、改めて気づかされたことがたくさんあります。そのことに、本日は改めて感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

(編者付記) 本稿は、二〇二二年(令和四)四月十六日の大倉山講演会における「森村市左衛門と教育活動」森村学園の創立と私学への支援事業」(横浜市大倉山記念館ホール)と題する講演内容に、加筆修正を加えて成稿したものである。

【参考文献】

- ・『森村市左衛門の無欲の生涯』(著者・砂川幸雄 草思社 一九九八年)
- ・『日米貿易を切り拓いた男 森村豊の知られざる生涯』(著者・森村悦子 東洋経済新報社 二〇二一年)
- ・『森村学園の一〇〇年』(発行・森村学園 二〇一〇年)